兵庫教育大学　教育実践学論集　第14号　2013年３月　pp.167－178

音楽科における異文化芸術の学びの特性に関する一考察

―音楽科授業において生ずるズレに着目して―

金　奎　道＊

（平成24年６月19日受付，平成24年12月６日受理）

A study on Learning about Cross-Cultural Art in Music Education：

Focused on Gaps Occur in Classroom Learning

KIM Gyudo ＊

This research pays attention to the gap in learning of cross-cultural arts and the purpose is to analyze the lessons and find out the characteristics of a cross-cultural arts study. Among the gaps between teachers，teaching materials，and students，1) the gap between teachers and teaching materials，2) the gap between students and teaching materials were analyzed.
As a result, it was found out that there were gaps in image and expression content of playing musical instruments, a gap in expression and musical laws, and gap in language and musical correlations.
Through these, the following lists a summary of characteristics of learning cross-cultural arts. First, learning the arts is established by understanding society and the cultural background of the cross-cultural arts. Secondly, it means understanding the gap in learning cross cultural-arts and places importance on the process of closing the gap.

Key Words: Gap, Ganggangsulrae, Culture contact, Cross-cultural art, Cross-cultural study

Ⅰ　目的と方法

１．問題意識と研究の目的

筆者はこれまで，異文化(注1)理解についての研究を進め，韓国の民俗芸能カンカンソーレのモデル授業案をつくり，日本の中学生を対象に異文化芸術(注2)を取り入れた音楽科授業を実施してきた。そこで生徒たちは，異文化であるカンカンソーレを通して，「その地に住む人々の生活と密接な関係があり，そこに住む人々の感情の表現であること」いわゆる，「芸術の根底にある態度(注3)」を学習することができた。つまり，異文化芸術を学習することの意義を明らかにしていく中で，音楽を取り巻く社会的・文化的コンテクストを学習することの重要性が浮き彫りになってきた。

ところが，カンカンソーレのコミュニティで暮らす人々が表現しようとした内容と，日本の生徒たちが異文化芸術としてカンカンソーレを受容する内容には，思いもよらないところで食い違った場面が多く見られた。それは，異文化芸術がもつ固有の響きや演奏形態，もしくはそれらが醸し出す雰囲気などが生徒たちに馴染んでいなかったために違和感をもち，不確定な状況に陥ったためであると考えられる。この違和感は一種のズレといえよう。そこで筆者は，このようなズレは否定されるものではなく，ズレが起こるからこそ異文化芸術学習が意義をもつのではないだろうか，という仮説をもつに至った。

そこで本研究では，学校音楽教育において生徒たちが異文化の音楽と接するとき，その表現内容とされていることについて生徒の受容にどのようなズレが見られ，授業過程の中でどのように納得していくか，いわゆるズレの解消に注目する必要があると考えた。

要するに，本研究の目的は，異文化芸術を学習する際に見られるズレに着目した授業分析を通して，異文化芸術の学びの特性を明らかにすることである。

２．先行研究の批判的検討

授業におけるズレに関連した研究として，授業場面におけるズレの具体的な様相を整理するとともに，そのズレの発生と修正を学びのチャンスとしてとらえ，教師の指導法について論じた研究が挙げられる(1)。また，教師の意図と子どもの学びにどのようなズレが生じているかを明確にし，そのズレが解消された場面における教師の役割について分析した研究がある(2)。音楽科においては，子どもの動きに見られるズレの諸相を，個の内部に起こる

＊兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生（Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education）

ズレと個と個の間に起こるズレに分類し，授業におけるズレの意味について考察した研究がある[3]。

しかし上記の先行研究は，いずれも同じ文化圏にいる教師が意図した授業に生じる諸要因間のズレについて論じており，自文化の尺度で異文化の音楽を価値判断していることで生ずるズレではないと考えられる。

換言すれば，人間がどのように異なる文化の音楽を受け止め，理解していくかについて，そのプロセスを明らかにした研究の中で，生徒たちがズレの発生を意識し，気づき，修正していくかに着目した実証的な研究は見当たらない。

異文化理解に関しては，谷正人が，従来の研究では異文化理解について，多様な文化を享受する心を育てる，ものの考え方などを理解させる「目標」，人々が音楽を通して互いに理解し認め合うという「到達点」だけが強調されていることを指摘している。他方，そのような結果に至るプロセスについては表面的にはなかなか言及されにくい側面があるものの，異文化という多様性の中に，自分が理解し得ない，或いは俄かには認め難いものの存在を認め，異文化の本質に気付くというプロセスが重要であると主張している[4]。

一方，ある音楽を学ぼうとする際に起こる学習者の認識に目を向けると，そこには二つのパターンが潜んでいることがわかる。谷によると，それは「学習者や聴き手が前提とする概念が何も揺るがされない状態のことを「わかりやすい」，既存の概念で捉えきれない場合を「わかりにくい」[5]と呼んでいる。しかし,「わかりやすい」と「わかりにくい」という認識の両側面においても，異文化であるからこそ間違って捉えることがしばしばある。

例えば，ジャワ島のガムランを取り上げた橋本龍雄の実践[6]では，リズムを担当している「クンダン」などに主旋律を合わすことが基本であるが，西洋音楽の語法に馴染んでいる学生たちは無意識的に主旋律に合わしてしまう傾向があったと報告している。また，異文化学習の一環として行った外国人との交流活動[7]の中で，児童の外国人に対するイメージが「背が高い」といった偏った先行概念から，活動の後は「やさしい」「かっこいい」「色が黒い」「色が白い」といった多様なイメージ形成といった変化が見られたと述べている。いずれも，異文化を自分の既有概念といった価値判断に基づいて捉えている事例であり，そこには学びの特性として一種のズレが生じていることがわかる。従って，異文化を学習するときにどのようなズレが生じて，そしてそれがどのように解消されるかを授業分析の焦点とすることは，学びの特性と指導方法を考える上で意義あるものといえよう。

3．研究の方法

研究方法は以下のようである。

(1) 異文化接触によって生じる個人の内的過程におけるズレの水準を確かめ，異文化に関する記述をズレの観点から捉える。

(2) 異文化芸術の学びの特性を明らかにするために，ズレを視点として，韓国の民俗芸能カンカンソーレの授業分析を行う。

(3) 分析結果を異文化の学びの特性の観点から考察する。

Ⅱ　異文化体験によるズレの水準

上記に示したように，異なる文化の音楽と遭遇する際に心の内面には様々な違和感（驚き，戸惑い，不安，緊張，動揺など）を引き起こすと考えられる。それは，我々が本来もっている美的感覚との相違によって生ずるものであり，個人の経験によって身に付けていた認識や知識とのズレによって生ずるものではないだろうか。

文化人類学者であるオバークK. Obergは，異文化に触れる経験をしたときの心理的反応をカルチャー・ショック（culture shock）[注4]といい，「これまで社会的なかかわり合いに関する慣れ親しんだサイン（記号）やシンボル（象徴）を失うことによる不安によって突然生まれるもの」であると概念を定義している。

オバークの理論を踏まえて渡辺文夫は，異文化との接触による問題を総合的なカルチャー・ショック論[注5]の中で提示し,「身体」「実存」「知覚」「思考（認知）」「感情（情動・情緒）」という人間の精神機能を司る 5 つの領域で整理し説明している。

その中で，暑さ，寒さ，湿気，乾燥，気候，食材などが異文化適応に大きな影響を与えることを表す「身体的水準」の問題と様々なショックを経験することでまわりから孤立してしまい，精神の不安定を感じる「実存的水準」での問題は，主に海外で仕事し生活するとき，すなわち相手文化の中での異文化接触によって生じることが多い[8]。

ここでは，上記 2 つの水準の問題を除き，自らの文化内で，異文化の音や音楽を媒介とした芸術と接触し体験することによって生ずるズレ，いわゆる音楽的なカルチャー・ショックとは何なのかを，以下の 3 つの「○○的水準」のズレに絞ってみていく。

まず,「知覚的水準」でのズレ（以下，知覚のズレ）は，「それまで経験したことがない匂い・味・音・風景あるいは光景を見たり，聞いたり，味わったり，嗅いだりすることによる[9]」感覚的な不協和である。次に「思考的水準」での問題（以下，思考のズレ）は,「それまで持っていたものごとを理解するための枠組みが通用しないことによって体験する[10]」いわゆる，既有知識との不協和であろう。そして「感情的水準」での問題（以下，感情のズレ）は,「様々な水準で問題を経験したときに引き起こされる感情，戸惑い，イライラ，疲れ，不安，恐怖など[11]」

を指す。

1．西洋人が聴いたアジアの音楽

柘植元一は，西洋の旅行記と見聞録から17～19世紀のヨーロッパにおける東洋〔筆者：異文化〕の音楽についての記述をまとめている。そこには，ペルシアの音楽について「その音楽は耳に快いどころか，粗野に響き，その合奏は音がまったく合っていなかった[12]」と語られている。また，日本の雅楽については「この笙，笛，篳篥（ひちりき），太鼓，鉦鼓からなる合奏は古代の音楽であるが，西洋人の耳には実に奇怪な響きがする。日本の音楽が嫌われる理由はほとんどこのぞっとする音響のせいである[13]」と述べている。

それに比べて，清朝の税関に勤めながら，清の音楽と舞踊の歴史を記録にとどめていたヴァン＝アルストJ. A. Van Aalst（1858～1914）は「中国音楽は，ヨーロッパの音楽に比べれば，不利であろうことは議論の余地がない。われわれ〔筆者：ヨーロッパ〕の観点からすれば，中国音楽は確かに単調で，喧しくもあり，また不快であるとさえいう人がいるかもしれぬ。だが，中国人がこの音楽に満足しているのなら，それでいいではないか。・・・（中略）・・・このような楽器は，洗練度や情感なしに奏されることもしばしばあるが，その形の美しさ，その安価さは注目に値する。中国人の考えでは，音楽は人心より生ずるものであって，それは人心の物に感じる，その表現なのである[14]」と語っている。

この二つのパラグラフについて柘植は，前者は極めてヨーロッパ的な音楽的価値観を露呈し，その尺度で異文化の音楽の価値判断をしていることに対して，後者は中国音楽についてヨーロッパのそれとはまったく異なる価値体系に基づくものである，という醒めた認識があったと述べている[15]。言い換えれば，異文化の音や音楽を未開の低い文化として見なすか，それとも文化の相違を認め，理解し共有する姿勢をとるかの違いともいえよう。

次に，イギリスの日本学者チェンバレンB. H. Chamberlain（1850～1935）が書き記した『日本事物誌』には「日本音楽の旋法では，われわれ〔筆者：西洋〕のような区別を知らないから，長旋法の力強さと荘厳さも欠いているし，短旋法の物悲しい柔らかい響きもない。また，この二つを交錯させることによって生ずる明暗のすばらしい効果もない[16]」とある。

この引用について，櫻井文夫は「チェンバレンが書いている日本音楽の旋法の問題は明らかに誤っている。日本の音楽には古くからヨーロッパの長・短調に対比させられる陽・陰旋法が存在していたからである[17]」と述べている。つまり，チェンバレンの記述からは，日本の音楽についての科学的な知識を持っていなかったために思考のズレが生じており，そのため偏見をもって異文化の音楽と接していると推測されよう。

もう一つの例として，アメリカの動物学者モースE. S. Morse（1838～1925）が1877年から1883年まで5年間の日本での生活を記録した『日本その日その日』の中で日本の音楽について書き綴られた部分を2カ所引用する。

外国人の立場からいうと，この国民は所謂「音楽に対する耳」を持っていないらしい。彼等の音楽は最も粗雑なもののように思われる。和声の無いことは確かである。彼等はすべて同音で歌う。彼等は音楽上の声音を持っていず，我国のバンジョーやギタアに僅か似た所のあるサミセンや，ビワにあわせて歌う時，奇怪きわまる軋り声や，うなり声を立てる[18]。

この音楽は確かに非常に妖気を帯びていて，非常に印象的であったが，特異的に絶妙な伴奏と不思議な旋律とを似て，私がいまだかつて経験したことの無い，日本音楽の価値の印象を与えた。彼等の音楽は，彼等が唄う時，我々のに比較して秀抜であるように聞こえた[19]。

前者の日本の音楽についての記述は，来日の初期である1877年に書かれたものである。その対象は，どのジャンルの音楽を指すのか定かではないが，未知の音に対して批判的に反応しているように思われる。そして，後者の引用は1882年7月15日に行われた東京女子師範学校の卒業式の最中に琴，笙，琵琶を伴奏とする日本の歌について語っているものである。ここでは，同一人物の記述とは思えないほど日本の音楽に対して絶賛している。この二つの記述の違いについて，櫻井は「5年間の日本での体験は，モースの日本音楽観を変えたようだ。当初は「奇怪きわまる軋り声」であり「生まれて初めて聞いたような，変な」音楽であったのが，その後，日本の様々な音楽に興味を持ち，親しみを覚えるうちに，共感できるようになったのだろうか[20]」と述べている。

要するに，最初は今まで接したことのない未知の音や音楽によって知覚のズレが生じ，驚き，戸惑い，不安といった感情のズレが生じたと考えられよう。しかし，徐々に異文化に慣れ親しくなり，感覚的な不協和が和らげ，さらに日本の音楽についての知識も増え，結果的には思考のズレが解消されたのではないだろうか。

以上のように，異文化とのかかわり合いにおける音楽的なカルチャー・ショックというのは，ある一つのズレの水準が単独で起こるものではなく，知覚，思考（認知），感情（情動・情緒）の三者が絡み合って生ずるものであるといえよう。また，ズレの解消により異文化に対する感じ方，聴き方が変わるなど，受容に変化が起こり，その結果，音楽的感性が豊かになるとともに，異文化芸術の価値を認識するようになったと考えられよう。

ただ，上記に示したように，これらの例証はいずれも，当該の土地を訪れ，異文化との接触によって生じた知覚・思考・感情のズレを表しているため，自分の内在化した文化の中で異文化を学習・体験するときに感じる違和感や葛藤とは相違があると言わざるを得ない。しかし，自国での異文化の学習について論じるためには，まずカルチャー・ショックを広義に解し，異文化体験による個人の内的過程の変化を確かめる必要があると考える。

以上のことを踏まえて，ここでは自分の内在化した文化の中で異文化を捉える音楽科学習として構想し，異文化芸術に対して違和感や葛藤が見られる理由は，耳慣れない音響の他にどのような要因があるのかを実証的にみていく。

2．授業分析に基づくズレの様相

授業におけるズレを共感的理解の手がかりとしながら算数科授業の創造を唱えている志水廣によると，ズレの存在には，教師と教材と子どもが三角形になると述べている。その詳細は，①教師にとって子ども理解のズレ，子どもにとって教師のズレ，②子どもの教材に対するズレ，③教師の教材に対するズレ，がある。これを図1で表すと次のようになる。

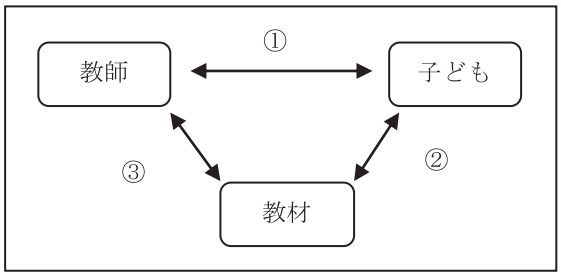


図1　ズレの存在

これらのことを本研究の課題である異文化芸術の学びの特性を考慮し，図 1〈ズレの存在〉に照らし合わせてみる。まず，授業が行われる前に授業者の設計においては，①の「教師と子ども（生徒）とのズレ」が予想される。

特に，今回の実践においては，教師自身がインフォーマントであるという特徴から自文化（教師）と異文化（生徒）と立場が異なるため，両者の間には知覚と感情のズレが生じるであろう。従って，教師は生徒の立場に立って，カンカンソーレを異文化芸術として与えるよう工夫し，視聴覚資料の提示，表現の体験が異文化理解の手がかりとなるよう試みた。

次に，②の「子ども（生徒）と教材とのズレ」についてである。生徒たちにとって初めて出会う異文化芸術という教材の特性から，異文化の受容様相にはあらゆる違和感が見て取れると想定できる。例えば，日本の伝統文化に根差した音階ではない音構成をもつカンカンソーレの歌，輪をつくり回ることを基本とするカンカンソーレの動き，そして異文化の音楽の歌詞など様々なところでズレがみられると考えられる。しかし，これらの音楽・動き・言葉はカンカンソーレを特徴づけている要素であるため，それぞれを授業過程の中で意味づける必要があると想定していた。

最後の③の「教師の教材に対するズレ」は，日本でのカンカンソーレの教材化，どのような楽曲を取捨選択するかから考えねばならない。そのため，筆者はフィールド・ワークを行い，芸能保持者からカンカンソーレを伝授し，さらに地域の人々の生活の様子と，その芸術の意味について調べた。しかし③の観点は，今回の授業実践とは直接関わらないため，ここでは除外する。

以上に述べた①と②の観点から，授業の中に生じるズレに注目し，その実態を明らかにすることは異文化芸術学習に示唆を与える上で意味があると思われる。

Ⅲ　検証実践の分析

それでは，実際の授業の様子を取り上げながら，授業過程においてどのようなズレが見られたかを検討していく。各授業場面において仮説を設け，実際にみられる状況と照らし合わせながら，その芸術文化に属している教師の意図と異文化芸術として受け止める立場に立つ生徒の学びには，どのようなズレが生じているのか，そしてそのズレは学習が進むにつれ，どのように解消され，生徒たちの新しい学習経験として定着されるのかについて明らかにする。

授業分析においては，2 時間の授業において，詳細な発話記録を作成し，教師の期待する学びと生徒の学びにはどのようなズレが起きているかを特定する。そして，そのズレが教師と生徒の相互作用によってどのように解消されたかを考えることで，異文化芸術の学習の意味を考察する。

1．実践概要

大阪府 I 中学校において，第 2 学年を対象に筆者が実施した，計 2 時間の韓国の民俗芸能カンカンソーレの授業実践を取り上げ，学習過程において生ずるズレの場面を抽出し分析する。そして，ズレが顕在化され追求される過程の中でどのような認識の変化が見られたかを検証し，異文化芸術学習におけるズレの意味を捉え直す。

〈研究実践の概要〉

○実践日時：平成23年11月22日（火）

○指導内容：カンカンソーレを特徴づけている構成要素と曲想

〔共通事項〕音楽を形づくっている要素と曲想

〔指導事項〕鑑賞イ－音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して，鑑賞すること。

図2　I中学校音楽室での授業風景

○単元：カンカンソーレの特徴を感じ取って鑑賞しよう。
○対象学年：大阪府I中学校 第2学年
○評価規準：
観点1：音楽への関心・意欲・態度
・カンカンソーレを特徴づけている構成要素と曲想に関心をもち，意欲的に取り組もうとする。
観点4：鑑賞の能力
・カンカンソーレを特徴づけている構成要素を知覚し，曲想を感受する。さらに，ソーラン節と比較しながら，カンカンソーレの味わいを他者に伝えている。

○指導計画（全2時間）

ステップ	学習活動	時
経　験 分　析	○儀礼と生活のカンカンソーレを見て真似する。 ○カンカンソーレを特徴づけている構成要素を知覚し，曲想を感受する。さらに，その背景となる文化・風土を理解する。	第1時
再経験	○文化的側面の理解を踏まえて，カンカンソーレを全体的に行う。	第2時
評　価	○カンカンソーレの公演を鑑賞し，紹介文を書いて，交流する。	

○評価規準

評価の観点	単元の評価規準	具体の評価規準
観点1 音楽への関心・意欲・態度	カンカンソーレを特徴づけている構成要素と曲想に関心をもち，意欲的に取り組もうとする。	①カンカンソーレを特徴づけている構成要素に関心をもっている。 ②カンカンソーレの文化的側面を意識して，意欲的に取り組んでいる。
観点4 鑑賞の能力	カンカンソーレを特徴づけている構成要素を知覚，曲想を感受し，民謡と生活の結び付きやその味わいを他者に伝えている。	①カンカンソーレを特徴づけている構成要素を知覚し，曲想を感受している。 ②民謡と生活の結び付きと関連付け，その味わいを他者に伝えている。

2．授業場面におけるズレの分析

(1)　分析の方法と視点

授業構成においては，ズレを視点として授業の流れを概観すると，ズレが生じているところは大きく3つの場面で見られた。ここで，教材・教師・生徒の間にズレが生じていると判断できる場面を抽出し，どのような学習構造下で，ズレが生起したのかを明らかにする。

(2)授業分析

【場面1】カンカンソーレの大まかな特徴をつかむ場面

T1：カンカンソーレは，ユネスコの世界無形文化遺産の指定を受けている韓国の伝統的な民俗芸能です。異文化の音楽であるカンカンソーレがどのような特徴をもっているか，みなさんと一緒に勉強してみましょう。（写真の提示）カンカンソーレは，このように，手をつないで歌いながら踊る芸能です。基本は輪になって動きますが，ときには隊列を変えることもあります。今から，カンカンソーレの実際の映像を見せますので，皆さんが感じたこと，思ったこと，気づいたこと，何でもよいので感想を教えてください。（映像の提示）
S2：賑やかな感じだなと思いました。
S3：日本の賑やかなお祭りとイメージが似ているんだなと思いました。
S4：日本の民謡だと一人で歌っているイメージがあったけど，カンカンソーレは大勢で歌っていました。
T5：そうですね。けっこう大勢で行いましたね。
実は，カンカンソーレには2種類があります。それは，儀礼のカンカンソーレと生活のカンカンソーレです。まず，儀礼のカンカンソーレをみんなで一緒にやってみましょう。後ろに移動して大きな輪をつくってもらえますか。
じゃ，音楽に合わせて右に回ります。みなさんは音楽を聞いて‘カンカンソーレ’の部分を真似して，歌ってくださいね。
（表現の体験の後）今，みなさんと一緒にやったのが儀礼のカンカンソーレですが，気づいたことや思ったことはありますか。
S6：みんなで手つないで回るのが何か楽しげな感じがしました。
S7：みんなで手つないで回ったから盛り上がりそうな感じがしました。
T8：最初から盛り上がった？
S9：いいえ，順々というか段々…，最初はけっこう静かな感じで。
T10：みんな気づいたと思いますが，儀礼のカンカンソーレは，速度に変化がありましたね。最初はどうだった？
S11：遅い。
T12：そうですね。ゆっくりしたところから始まって中ぐらいになって最後は，速くなりました。このように速度がだんだん変わっていきましたね。

生徒たちが異文化芸術と初めて出会うこの場面では，カンカンソーレを鑑賞し，表現の体験をした後の発言から曲想・イメージと演奏の表現内容とのズレが見られた。つまり，②の「子ども（生徒）と教材とのズレ」である。

ここでは，カンカンソーレの円舞形態と隊列の変化，人々の生活の様子などの文化的・社会的コンテクストを理解させることによって，厳かな感じ，楽しげな感じなどの表現内容を感受させようとした。そして，なぜ，そのような感じがしたのかを音楽的な特徴から考えること

で，〈ゆっくりした〉〈中ぐらい〉〈速い〉といった速度の変化に注目させる。これらは，拍を感じながら歩くことができる，音頭の歌に対して一同の部分を歌うことができるといったパフォーマンス（表現の体験）の学習につなげていく意図をもって構想した場面である。

実際の様子では，まず授業の冒頭の部分で，視覚的資料を提示し，カンカンソーレの隊列（輪，螺線）が変わっていくことについて説明した。そこには輪をつくり，反時計方向に回っている様子，隊列を変化させ，人々がモノを身体で表現している様子が映っている。また，現地の村人が十五夜で，カンカンソーレを行う様子や農作業をしている生活の様子と自然環境の場面を視聴覚資料で提示することでモチベーションを高めようとした。

図３　カンカンソーレの様子と自然環境
（UNESCOホームページより）

カンカンソーレが生み出す雰囲気や曲想について，生徒たちの感想はS2「賑やかな感じだなと思いました」，S3「お祭りとイメージが似ているんだなと思いました」，S4「日本の民謡だと一人で歌っているイメージがあったけど，カンカンソーレは大勢で歌っていました」とカンカンソーレに対する初めの印象は明るいイメージとして受け止めていたといえよう。また，日本のお祭り，日本の民謡といった自文化の音楽に照らし合わせて，そこから異文化芸術との共通点と相違点を見つけ出すという特徴が見られた。

その後，カンカンソーレには，儀礼と生活という２種類があると説明することで，儀式と生活と音楽との関わりの理解を促した。生徒たちはまず，儀礼の部分を経験するため，実際に手をつなぎ，輪になって回るカンカンソーレの基本的な動きを体験した。パフォーマンスの後，感じ取ったことを発表し合うなかで，生徒たちの「楽しげな感じ」「盛り上がりそうな感じ」などの発言に対し，教師は「最初から盛り上がっている？」と問いかけ，楽曲の形式の知覚を促した。教師は，儀礼のカンカンソーレは〈ゆっくりした〉〈中ぐらい〉〈速い〉といった速度の３段階の構造になっていることと，速度の変化に特徴があることを提示することでまとめた。

授業の【場面１】で見られるズレは，S6「楽しげな感じ」，S7「盛り上がりそうな感じ」の発言のようにカンカンソーレの表現内容を全体的に明るいイメージで捉えているところである。カンカンソーレは，〈ゆっくりした〉から〈速い〉へと段々盛り上がっていく構造をもっているが，ほとんどの生徒たちは〈ゆっくりした〉〈中ぐらい〉によって醸し出される厳かで，神秘的な感じより〈速い〉によってもたらす明るいイメージに注目していた。

この場面で【ズレの生じた要因】は，生徒たちが互いに手をつないで回る動作に楽しさと親しみを感じていたことによると推察できる。それは特に，ゆっくりしたテンポに合わせた足取りができず，やや速いテンポで回っている様子や生徒たちの間で絶えず笑い声が聞えていたことからも推察される。これまでの環境と音楽経験の観点から見ると，この知覚と感情のズレは生徒たちの身につけた自文化の雰囲気・特質と異文化の間に起こる感受の差異によるものと考えられよう。

【場面2】カンカンソーレ音楽の知覚と感受

T13：先に，儀礼のカンカンソーレの音頭の歌詞を見てみたいと思います。まず，〈ゆっくりしたカンカンソーレ〉の歌詞は，「月が出る，月が出る，東海の東天に月が出る，あそこのあの月は誰の月なのか」というように，カンカンソーレは，必ず月を歌うことから始まります。これには，満月を眺めながら，心身を清め，月を賛美する意味があります。

次に出てくる〈中ぐらいのカンカンソーレ〉では，即興的に自分の感情を歌うことが多いです。喜怒哀楽のように嬉しいこと，辛いこと，大変なこと，悲しいこと，楽しいことなど何でもよいです。この歌詞は，その中の一つです。「あそこの大山の下に，長く広い畑に，もち粟を耕し，畑の畝にはササゲを植えて，雑草がはびこって，三つの畝間を耕したら，日が西山に沈む」。その他にも，子どもに対する親心，嫁入り生活の大変さ，親に対する切ない気持ちなどを歌うことがあります。

・・・・(中略)・・・・

T14：それでは，音楽を聴きながら，ワークシートの曲想の部分を書いてください。（発表後）今度はどうしてこのような感じがするのか，音楽の特徴を見つけてみましょう。もう一度音楽をかけます。

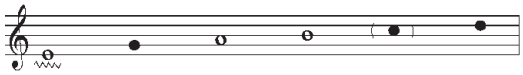
〈生徒の発言を黒板にまとめる〉

	曲想	音楽の特徴
ゆっくりした	祈っている感じ，厳かな感じ	声を一つ一つ伸ばしていて音を震わせた。一音一音が長く伸びている。
中ぐらい	楽しさが伝わる。	リズム感が良い。まだ音がのびている。
速い	明るい，跳ねている感じ。踊り出すような雰囲気。	跳ねるように歌っていた。音が伸びていない。

T15：ゆっくりしたカンカンソーレの部分では，とくに「音を震わせていた」という発表がありました。ここで，カンカンソーレの音階について簡単に紹介しま

す。

（黒板に音階を提示する。）



譜例1　カンカンソーレの音階

T16:ここでは，ミ・ラ・シが中心音です。そして，たまにソ・レの音が出てきます。みなさんが知っているド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの音階ではなくて，ミ・ソ・ラ・シ・レという音階をもっています。その中で，ミの音を震わせていました。どんな歌い方なのか，先生が先に歌ってみます。みなさんも一緒に歌ってみましょう。
S17（全員）：カン～カン～ソ～～レ（歌う）

カンカンソーレの音楽的特徴を知覚，曲想を感受し，それを表す技能を求めたこの場面では，表現（歌い方）と音楽の法則性(注6)とのズレが見られた。つまり②の「子ども（生徒）と教材とのズレ」である。

ここでは，儀礼のカンカンソーレの歌詞の意味を知り，歌に込められている歌い手の気持ちや思いを感じ取り，地域の人々の生活ぶりや生活感情を想像させようとした。そして，歌い手の渋くて，趣のある表現から，侘びしく痛ましい感じなどを感受させることで，音楽を形づくっている要素と関連づけて取り上げる。つまり，音を大きく揺らす歌い方に特徴があるということから音階や装飾音を知覚させようとした。それらを表す技能として，カンカンソーレの中心音であるミの音を震わせて歌うことができることを意図して構想した場面である。

実際の様子では，生徒たちは，カンカンソーレが行われる際に歌われる歌詞の内容に注目することで，人々の生活ぶりや自然環境を想像することができた。そこには，嫁入り生活の大変さ，親に対する切ない気持ち，子どもに対する親心が描かれていた。これは，人間生活の普遍的な要素であり，異文化芸術として取り上げなくても十分に共感できる内容であるともいえよう。そのため，異文化の言葉によって伝わる内容の難しさからは少しは解放され，納得して頷く様子が見られた。

カンカンソーレのイメージ，雰囲気，情景などを感受した後，どうしてそのような感じがしたのかを音楽の特徴から考える場面に移った。そこで，〈ゆっくりしたカンカンソーレ〉について「祈っている感じ」「厳かな感じ」などの回答があった。その根拠について生徒は「声を一つ一つ伸ばしていて音を震わせた」という発言が出た。教師はこの発言に注目し，カンカンソーレの音階を取り上げ，ミ・ソ・ラ・シ・レという5音の音組織の中で，実際にミ(注7)の音を震わせて歌い，歌い方の特徴を知覚させた。これらによって生徒たちには，ミを震わすカンカンソーレの音楽的特徴に気付いて歌うことができ，歌い手がどのように思いや意図を込めて歌っていたのかを考えることができた。

授業の【場面2】のズレは，カンカンソーレの歌い方の特徴を表す技能に見られた。特に，ミの音を震わせて歌う際に，教師の説明を通して生徒たちはカンカンソーレの音階の仕組みについては理解しているものの，実際の歌では，震わす音があまり表現できなかった。つまり，歌として表す技能は，まだ不十分であった。

この場面で【ズレの生じた要因】は，ヨーロッパ近代の長・短音階，若しくは日本音階に聞き慣れている生徒たちにとって，異文化芸術であるカンカンソーレの音階は既成の音感覚，すなわち日本人の伝統的な音感とは異なり，特に身体の使い方と発声の仕方が馴染んでいないため，知覚と感情のズレが生じていると考えられよう。

【場面3】言葉と音楽，リズムと曲想の相関性

T18：生活のカンカンソーレの最初の歌は〈むしろを巻こう〉です。（教師の模範に従って歌う，歌詞の説明をする）
T19：むしろは，農業を中心とした昔の人々の生活には欠かせない農具でした。（写真の提示）このように，穀物を天日に乾かすときに敷いて，片付けるときは巻いておきます。
次は，〈ニシンを編もう〉を紹介します。・・・（中略）・・・（歌の練習と歌詞の説明をする）
それでは実際に，やってみたいと思います。
パフォーマンス（2曲の歌に合わせて，それぞれの所作を練習する）・・・（中略）・・・
T20：それでは，音楽を聴いて生活のカンカンソーレの〈むしろを巻こう〉と〈ニシンを編もう〉の雰囲気・感じ・イメージなどの曲想について発表してください。
S21：リズムがよくて，元気づけるような感じ，リズムがよくて楽しい感じです。
S22:テンポがよく,仕事が楽しくできる感じ（後も同じ）
S23：強弱があって，明るく跳ねているイメージです。
S24：たくさんの人が歌っている感じ。強弱があって，跳ねている感じです。
T25：今度は，どうしてみなさんが発表したような感じがしたのか，音楽の特徴をみつけてみましょう。
S26：リズムが跳ねました。
T27：生活のカンカンソーレは，なぜこのように跳ねる感じがするのでしょうか？先生が生活のカンカンソーレの歌詞を歌わずに，普通にしゃべってみますね。（現地語でしゃべる）
「巻こう巻こう，巻こう，雨が降るから，むしろを巻こう」
つぎは歌ってみます。（現地語で歌う）
どうですか？何か気が付いたことありましたか。
S28：？？？？？？
T29：じゃ，普通にしゃべる言葉と歌の強弱は同じですか？違いますか？（沈黙が続く）
同じだと思う人？（やっと半分の人が挙手する）
違うと思う人？（若干名の人が挙手する）
T30：そうですね。普通にしゃべる言葉の強弱が，このような音楽のリズムを生み出しているのです。つまり，韓国の言葉の特徴によってこのような音楽が生まれたということです。
T31：もう一つ，先ほどのみなさんの発表の中で，「リ

ズムが跳ねていました」という発言がありましたね。
この　♪♪♪　長い音符と短い音符がありますけど，生活のカンカンソーレの楽譜から探してみましょう。このリズムを意識しながらもう一度歌ってみましょう。（歌ってみる）生活のカンカンソーレは　♪♪♪　が多いです。この 3 拍子系のリズムによって，跳ねる感じを生み出しているんです。
T32：それでは，音楽をもう一度かけますので，他にどのような音楽の特徴があるか探してみましょう。
S33：さっき，言っていた 8 分音符が 3 つあるリズムが何回も出てきます。
S34：跳ねるようなリズムがありました。
S35：速度が速く，音同士がつながっています。

言葉と音楽，リズムと曲想の相関性について取り上げているこの場面では，話し言葉が音楽に与える影響について，教師と生徒の間に感覚のズレが生じている。つまり，言葉と音楽との相関性のズレであり，①の「教師と子ども（生徒）とのズレ」に当たる。

ここでは言葉と音楽，リズムと曲想とのかかわりを知覚し，生活のカンカンソーレの跳ねる感じやウキウキする感じは，これらの相関性によるものであると理解させようとした。そして，リズムパターンと歌詞と旋律とのかかわりを知覚・感受し，表す技能として表現させる意図をもってこの場面を構想した。

実際の様子では，生活のカンカンソーレの学習として〈むしろを巻こう〉と〈ニシンを編もう〉の楽曲を取り上げ，まず歌の練習をした。しかし，むしろとニシンは，昨今の生徒たちにとって馴染みのないモノであるため，写真などの視覚的資料を使い，歌詞の意味や生活の様子にまつわる話をすることで音楽の理解を深めた。実際，2 つの楽曲に動きをつけて歌うことで，よりカンカンソーレの音楽的特徴を知覚し，それらが生み出す特質が感受できたといえる。

このような経験の後，生徒たちは生活のカンカンソーレの感じについて，S21「リズムがよくて元気づけるような感じ」，S22「テンポがよくて，仕事が楽しくできる感じ」，S23「強弱があって，明るく跳ねているイメージ，たくさんの人が歌っている感じ」などの発言が出た。

もともと，生徒たちが音楽のイメージを生み出す根拠として音楽の構成要素を理解する意図があったが，発言の中で，既に「リズム」「テンポ」「強弱」といった音楽の構造を表す用語が散見したので，異文化の音楽の曲想とイメージを生み出す根拠として「跳ねるリズム」と「強弱」を取り上げ，注目させようとした。

まず「強弱」に着目して，生徒たちが話し言葉と音楽との相関性に気づくように働きかけた。話し言葉と音楽が互いに影響し合うことを意識させるために，歌詞を話し言葉，すなわち朗読調のように言い，その後，強弱を誇張した形で歌を歌うことで，韓国の話し言葉の特徴によってこのような音楽が生まれたことを伝えた。

次に「跳ねるリズム」に注目し，3 拍子系のリズムを提示することで，生活のカンカンソーレのリズムパターンは，4 分音符と 8 分音符の組み合わせによってつくられたことを説明し，楽譜を見ながら歌うことでリズムパターンの特徴を確認した。このように，生徒たちは生活のカンカンソーレの音楽的特徴として「強弱」と「跳ねるリズム」を知覚・感受し，これらを歌とスキップという動きの技能として表した。

授業の【場面 3 】にみられたズレは，生徒の異文化の音楽に対する言葉そのものの高低アクセントの知覚にあった。それは，歌を伴う異文化芸術の学習にあたって，言葉が異文化理解の障害にならないように，なるべく現地の言葉の特性を生かす範囲内で，歌詞は最小限に提示した。しかし，生徒たちにとって異文化の音楽であるカンカンソーレの言葉がもつ抑揚の理解は少し難しく，ほとんどの生徒は話し言葉から自然に音楽の拍節感を感じ取れなかった。

この場面で【ズレの生じた要因】は，教師と生徒の言語感覚の差異によるものであり，異文化言語の高低アクセントの知覚に求められる。つまり，生徒がもつ言葉と音楽の既有の枠組みからは，カンカンソーレの言葉と音楽が互いに影響し合うことについての理解不足と両方に共通した要素の認識ができなかったためズレが生じていたといえよう。

【場面 4】社会的・文化的コンテクストの提示

T36:私は，カンカンソーレは，その土地の人々にとって，どんな意味をもっていたのかを調べるために，韓国に行ってきました。そこで芸能保持者と会って，いろいろインタビューをしました。その内容を見てみましょう。
Q1. カンカンソーレを習ったきっかけは？
　昔，街灯もなかった時代に，満月が昇り，また暮れるまで一晩中カンカンソーレを行うのを見ました。小学生になってからは，お母さんたちの真似をして休みの時間には「みんなおいで，カンカンソーレしよう」といって友たちと遊んだ記憶があります。
Q2. あなたにとってカンカンソーレとは？
　幼い頃はただ見て楽しむだけでしたが，大人になってから振り返って深く考えてみると，カンカンソーレは女の恨み（ハン）－人生の苦難・絶望などの集合的感情－を晴らす意味があると思います。お母さんたちが歌っている歌詞は，胸にこびりついている折々の悲しい，切ない気持ちを歌ったものでした。
　例えば父親は，私が小さい頃に亡くなって，母親は早くも 31 歳で未亡人になりました。私は末っ子でしたが，母は再婚もせずに私の兄弟・姉妹を育ててくれました。夜になると，私にカンカンソーレの歌を教えてくれました。今振り返ってみると，むかしは人々の娯楽というのはカンカンソーレしかなかったのだろうと思います。
　歌詞を見ると，「娘よ，娘よ，末の娘や，ご飯食べて

可愛く大きくなれ」とか，寂しい気分のときには亡くなった父に対して「むごくてきつい人よ，赤子のような子どもを私に残して，貴方だけ先に逝ったのか」のような歌を泣きながら歌っていたのを今も生々しく覚えています。そのときは,母親が泣くのが恥ずかしくて,「母さんは，なぜ泣くのよ，恥ずかしいからやめてくれ」と言いましたが，この年になって考えると，それが母さんの恨み（ハン）の音楽だったことがわかりました。
Q3. これからの願いは？
　最近の若者たちはカンカンソーレをあまり知らないです。じっくり考えるとカンカンソーレは，本当に深みのある伝統芸能なので，もっと多くの人々にカンカンソーレをやってほしいと思います。そして，代々受け継がれていくことを望みます。
T37：これを見て，思ったことや気付いたことなどがあれば，何でもいいので発表してください。
S38:最初は楽しいイメージがあったけど，インタビューの内容を見てからは，あ！そういう音楽なんだと感じました。
S39：伝統芸能の人（芸能保持者）は，気持ちを込めてカンカンソーレをやっていることがわかりました。
S40：カンカンソーレは，歌う人の気持ちや思いが入っている音楽だということがわかりました。

ここではカンカンソーレの地域の人々の生活における芸術文化の意味とその価値を生徒たちと共有し合うために，芸能保持者によるインタビュー内容を取り上げた。そこには，保持者が幼い頃からカンカンソーレを見て育って，友たちと一緒に遊んだ思い出話と，大人になってからは，母親の歌に込められている悲しい，切ない気持ちを理解できるようになったことなどが語られている。

これらの映像をみてからの生徒の感想をみると，S38「最初は楽しいイメージがあったけど，インタビューの内容を見てからは，あ！そういう音楽なんだと感じました」，S39「伝統芸能の人は，気持ちを込めてカンカンソーレをやっていることがわかりました」，S40「カンカンソーレは，歌う人の気持ちや思いが入っている音楽だということがわかりました」などがあった。このように，これまでのカンカンソーレの楽しい，明るいイメージとして受け止めていた偏った理解，すなわちズレが覆されて，歌うことで悲しい気持ち，切ない気持ちを表現し，その上，恨みを晴らす意味があることが理解できているといえよう。つまり，芸能保持者のインタビューによって曲想・イメージと演奏の表現内容のズレが解消されたのではないだろうか。

その後，まとめの活動として儀礼のカンカンソーレから生活のカンカンソーレまで通して行った。ここでも，【場面２】の表現（歌い方）と音楽の法則性とのズレと【場面３】の言葉と音楽との相関性のズレが解消され，納得していく姿が見受けられた。

要するに，カンカンソーレの最初に行った表現の体験とは違う姿勢で取り組んでいる様子が窺えた。儀礼のカンカンソーレの〈ゆっくりした〉〈中ぐらい〉〈速い〉といった速度の変化を感じ取っているような足取りで表現していること，音頭の歌に対して一同の部分の歌‘カンカンソーレ’を震わせて歌おうとする生徒が増えたことが挙げられる。この点は，異文化芸術と向き合う態度が大きく変わる場面であったともいえよう。

３．分析結果

以上の分析から，本稿で取り上げていた，コミュニティで暮らす人々が伝える表現内容と，日本の生徒たちが異文化芸術としてカンカンソーレを受容する内容にみられるズレをまとめる。

まずは，曲想・イメージと演奏の表現内容とのズレがみられた。儀礼のカンカンソーレを,〈ゆっくりした〉〈中ぐらい〉〈速い〉の順に表現の体験過程を経た後の生徒たちの発言には「賑やかな感じ」「楽しげな感じ」と異文化芸術の感覚的印象を明るく捉えていた。それは，輪になって手を握り合って回る動作には興味を示しているものの，そこに込められている気持ちや思いまでは理解の準備ができていないためであると推察される。

ところが,【場面４】の芸能保持者のインタビューに注目してみるとその理由が推測できる。つまり，保持者自身の発言にも「幼い頃はただ見て楽しむだけ」「みんな～カンカンソーレしよう，といって友たちと遊んだ」のように，幼い頃はカンカンソーレの意味と価値をあまり知らず，楽しむだけであったことが見て取れる。

言い換えれば，カンカンソーレの文化圏である韓国の人々でさえ，子どものときはカンカンソーレを楽しむものとして見ていたと受け取れる。従って，異文化芸術に初めて接した際に見られる日本の生徒たちの鑑賞態度に「明るさと楽しみ」の反応を示していることは当然のことであるともいえよう。学習能力の発達，経験の成果によって徐々に，芸術の本質を深く吟味するようになるのではないだろうか。

さて，表現内容が間違って伝わることは，カンカンソーレを伝えてきた人たちのインタビューの内容から，それが悲しみの表現であることを授業場面で提示することでズレが解消された。その芸術を取り巻く文化的背景を知ったことで,「あ！そういう音楽なんだ」と正しく受け止めるようになり，芸術の雰囲気・特質の感受が変わるようになったといえよう。つまり，社会的・文化的な脈絡の理解が異文化芸術の学習の際に重要な働きをしていることを再確認することができた。

次に見られたズレは，表現（歌い方）と音楽の法則性とのズレであった。そもそも，日本の民謡のみならず，世界の様々な声の音楽において，歌の表現を豊かにするために，旋律を飾る手法は散見する。だか，カンカンソーレのように主音を揺らす奏法はあまり見当たらない。そ

のため，生徒たちはカンカンソーレの歌を，抑揚をつけず歌うことが多かった。そこで，カンカンソーレの音階の構造を提示し，ミの音を震わす歌い方によって，趣のある音楽として表現しようとする意図が込められていることを伝えると，最初のパフォーマンスに比べて，まとめの表現の体験では生徒たちも意識的に音を震わせて歌おうとする姿が見受けられた。

ここでいうカンカンソーレの音を震わす歌い方は，日本伝統音楽の民謡装飾法の中のこぶしに相当する概念であるともいえる。〈ソーラン節〉を教材に，日本の中学生を対象にこぶしの取り上げた実践（2時間）(注8)では，生徒全員がこぶしを意識して入れようと積極的に取り組んだものの，こぶしの回しというより音程がぶれているに過ぎなく，生徒自身も納得できる表現までには至らなかったと報告している。

要するに，こぶしの効果に気づき，装飾された旋律線を模倣しようと意識しても，それを生かした伝統的な歌唱表現となるためには歌唱指導に時間がかかるのではないだろうか。すなわち，そこには自文化や異文化を問わず，表現意図と技能の間のズレが暗黙的に潜んでいるといえよう。

そして，最後に見られたズレは，言語と音楽との相関性のズレであった。これは，生活のカンカンソーレの歌詞を話し言葉と歌によって比較聴取させることで，言葉そのものの強弱によって音楽のリズムを生み出していることを知覚させる意図をもった活動であった。しかし，生徒たちは異文化の言葉がもつ抑揚の特徴を感じ取ることができず，ほとんどの生徒は韓国の言葉の特徴によってこのような音楽が生まれたことの理解はスムーズに行われない様子が見受けられた。ところが，カンカンソーレに取り組む時間が経つにつれ，理屈でしかわかってないことが段々覚えて歌うようになってからは，生徒たちの歌と動きにも変化が見られるようになった。

それは，言葉と音楽が影響し合って生まれる跳ねるリズムを生かし，所作をしながら歌うといった表現の技能として表れるようになったことである。

いずれにせよ，異文化芸術学習においてズレを焦点として行った今回の授業分析では，その芸術が本来もっている特性とは異なる意味で感じ取られてしまう場合があることがわかった。また，聞き慣れなかった異文化の教材のもつ特性によって生じるズレが多いことが確認できた。

Ⅳ　結論と今後の課題

本論では，異文化芸術を学習する際に，教師と教材と生徒の間に起こりうる食い違いを①教師と生徒とのズレと②生徒と教材とのズレを視点とし，実践分析を行った。そして，知覚・思考・感情のズレが生じていることを確認した。詳しく言うと，曲想・イメージと演奏の表現内容とのズレ，表現（歌い方）と音楽の法則性とのズレ，言語と音楽との相関性のズレが存在することを明らかにした。

結論では，分析結果より導き出されたズレの様相を根拠に，異文化芸術の学びの特性について以下の二点を挙げる。

(1)　異文化芸術の学びは，その文化的背景を理解することによって成立する。

音楽科授業において，異文化の自然や風土などの文化的背景を知ることは，異文化芸術を理解する基盤となる。本実践において，生徒はインタビューを通してカンカンソーレの歌い手が折々の悲しい，切ない気持ちなどを歌うことを知り，〈ゆっくりしたカンカンソーレ〉の速度の意味が理解できた。そして，それを実際に歌と動きを通して表現する中で，音楽をより広くより深く捉えるようになった。

つまり，音楽によって生み出されるイメージや感情を感じ取り，音楽の構成要素の働きを知覚し，自分のイメージや感情を歌や身体を通して表現する，といった音楽学習の過程において，文化的背景の理解は学びの助けとなる。また，こうした過程によって異文化芸術の本質が理解できると考えられる。

(2)　異文化芸術の学習では，ズレの気付きからズレの解消までのプロセスを大事にしていくことによって学びが意味をもつ。

生徒たちは既存の概念，すなわち自分なりの聴き方と感じ方に基づいて異文化芸術を捉えがちであるため，授業の中で生じたズレについて生徒自ら「実はちょっと違うんだ」とか「少しズレているんだな」と気付かせていく過程が重要になる。そして，ズレがどのように解消されていくかの過程を究明することで，生徒の学びへの理解と教師の教授行為の改善につながることに他ならない。上記の授業分析でも見られたように，生徒たちが「カンカンソーレは手をつないで楽しそうに踊っているんだ」と間違って捉えていることに対して，ズレがあることに気づかせていくことを授業構成の中で位置づける必要があった。それはいわゆる，授業における気づくプロセスといえよう。その方法は，教師による説明ではなく，生徒たち自らに気づかせていくことに意味があり，「あ！悲しみの表現もあるんだな」と感じ取っていくような学びの場を提供することが異文化理解においては大事であると考えられる。

今回の実践では，学び手が自ら異文化のズレに気づきながら主体的に知識を構成していく音楽科授業の活動構成までは提案することができなかった。文化的側面の指導についても，それを単なる情報の伝達で終わらせないためには，活動構成のどこに組み入れるかが重要となっ

てくると考えられる。このことは今後の課題としたい。

ー注ー

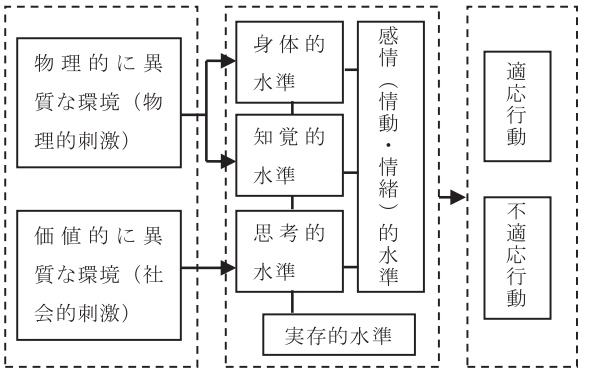
1　「異文化」とは，辞書的意味から（広辞苑第六版）生活様式，行動様式，宗教などが自分の生活圏と異なる文化のことを指す言葉として用いる。言い換えれば，人間が生まれ育っていく中でその社会のものの見方，感じ方，価値，態度などを身に付けていた文化を自文化と呼び，このような社会化の過程を経てない文化を異文化といえる。

2　芸術文化に対する人間の認識や行動を日本と韓国という二つの文化・環境に跨って観察し，異文化芸術の学びの特性を考察した本稿は，一種の異文化間研究（cross-cultural study）ともいえよう。従って，ここでは異文化芸術はcross-cultural artとして用いる。

3　デューイは『経験としての芸術』の中で，異文化芸術が我々自身の芸術に対してもつ意義について，次のように述べている。「われわれが，多民族の芸術をとおして，他にも存在するいろいろな芸術の根底にある態度を理解すればするほど，われわれの芸術はローカルなものでも，偏狭なものでもなくなっていく。」ここで，「芸術の根底にある態度」は原文では「The attitudes basic in other forms of experience」とされている。（J. Dewey，1980（1934），*Art as Experience*，A PERIGEE，p.346.　訳は栗田修訳『経験としての芸術』晃洋書房，p.415，2010による。）

4　オバークは「カルチャー・ショック：新しい文化的環境への適応」と題した論文の中で，カルチャー・ショックとは「anxiety that results from losing all of our familiar signs and symbols of social intercourse」であると定義している。現在は，異文化と関わる心理学の用語よして多く使われている。ここでは，思いもかけない異なる文化の芸術に出会ったときの驚きを表す用語として使われている。K. Oberg，Culture shock: Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*，July－August，pp.177 ～ 182，1960

5



カルチャー・ショックの心理学モデル（渡辺，1980）

渡辺は，様々な精神的なショックを心理学的な基礎概念で分類し，次の心理学モデルをつくった。

6　小島は「表現と音楽の法則性とのズレ」について歌唱の授業で不自然な箇所で息つぎをしているM児の例を挙げ，自分の演奏の批評を受け，人の演奏と聴き比べるうちに，自分の息つぎの位置の不自然なことに気づき直していった。そしてそのことを通じて，フレーズに対する感覚をもめざめさせられたのであると述べている。

7　小泉は，韓国の民謡の音階には，中国や日本の基本音階と同じものがあると述べ，その中で，ミに主音がくるものは，日本はもちろん中国にもあまり見られない点からして，朝鮮独特もののように思われ，古い朝鮮固有の音階かも知れない，といった見解を示している。小泉文夫『合本 日本伝統音楽の研究』音楽之友社，pp.210 ～ 215，2009を参照。

8　平成17 ～ 20年度科学研究補助金基盤研究（C）研究成果報告書，研究代表者澤田篤子「日本の伝統文化の特質に基づく音楽科教材の現代化 - 学校音楽教育および音楽科教員養成において－」洗足学園音楽大学，pp.44 ～ 60，2009，松本佳奈「学校音楽教育における日本の伝統的唱歌の指導に関する研究－民謡の歌唱の場合」（平成17年度洗足学園音楽大学大学院音楽研究科修士論文）に詳しい。

ー文　献ー

(1)　志水廣，井出誠一「算数科／教師と子どもの学びのずれの研究」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第6号，pp.117 ～ 124，2003

(2)　笠原道宏「教師の意図と子どもの学びのずれをいかに解消し生かしていくかについての研究－5学年『概算』における切り上げ・切り捨ての学習を通して－」上越教育大学学校教育総合研究センター『教育実践研究』第17集，pp.37 ～ 42，2007

(3)　小島律子「子どもの動きに見られるずれの諸相」帝塚山授業研究所編『授業分析の理論』明治図書，pp.151 ～ 163，1978

(4)　谷正人，「異文化理解における『わかりにくさ』の効用－わからない自分への気付きへ－」，日本音楽教育学会編『音楽教育学』第37巻 第2号，pp.1 ～ 2，2007

(5)　同上書，p.4

(6)　橋本龍雄「音楽科学生におけるガムラン音楽受容へのアプローチの様相－ジャワ島のガムランの場合－」『福井大学教育地域科学部紀要Ⅵ（芸術・体育楽 音楽編）』38，pp.1 ～ 16，2009

(7)　松岡靖，中田晋介，古賀一博，朝倉淳「小学校の異文化理解に関わる認知的発達」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第39号，pp.93 ～ 98，2011

(8) 渡辺文夫『異文化と関わる心理学－グローバリゼーションの時代を生きるために－』サイエンス社pp.13～17，2002
(9) 同上書，pp.14～15
(10) 同上書，p.15
(11) 同上書，p.17
(12) 柘植元一『世界音楽への招待』音楽之友社，p.30，1994
(13) 同上書，p.30
(14) 同上書，p.31
(15) 同上書，pp.30～31
(16) B.H.チェンバレン著，高橋健吉訳『日本事物誌2』平凡社，p.103，1969
(17) 櫻井哲男「西洋人が聞いた日本の音－音楽における」『阪南論集人文・自然科学編』35（4），p.190，2000
(18) E.S.モース著，石川欣一訳『日本その日その日1』平凡社，pp.102～103，1970
(19) E.S.モース著，石川欣一訳『日本その日その日3』平凡社，p.67，1971
(20) 櫻井哲男，前掲書，p.192

－図　版－

図 1 志水廣・木下美津子『「ずれ」を追求する算数科授業の創造－共感的理解を通して－』明治図書，p.17，2005
図 2 大阪府 I中学校音楽室での授業風景（2011年11月22日撮影）
図 3 カンカンソーレの様子と自然環境（UNESCOホームページhttp://www.unesco.org/new/en/culture/より）

－謝　辞－

本研究の遂行にあたり，御助言，御指導をいただきました大阪教育大学の小島律子教授，田中龍三教授，そして快く授業実践に協力して下さいました（元）大阪教育大学附属池田中学校の興梠徹先生に御礼申し上げます。